

## 「会社員の私がふたたび学生となったわけ」

松井 徳子 49 回生

音楽や絵を描いたり物を作ったりすることが好きだった私の文理選択は難しいものでした。自分の好きなそれらは文系・理系のどちらにも属さないような気がしていましたし、“会社員”になるのは嫌だな、と漠然と思っていました。次第に音楽に携わる仕事に就きたいと思うようになり、「音」とは何かを学べる理系を選択しました。どの大学に入りたいか、ではなく、電気電子工学を学べる大学を選び、卒業後は一般企業に就職し、エンジニアとしてマイクロホンの設計に従事することになりました。「音」に携わる仕事には就けましたが、結局は”会社員”になったわけです。

しかし今は“会社員”である自分を誇りに思います。自分が携わったマイクが、政府の記者会見やTV番組、コンサートやスポーツ競技（カーリングをTVで観戦したことはありますか？実は選手ひとりひとりマイクをつけて競技しています。どんな作戦を話し合っているのか、視聴者もわかるようになり、観戦がより面白くなったと思います！）で使われるたび、社会に貢献しているということを実感します。マイクで収録された音がオーディエンスである自分に巡り戻ってくる、というこの大きな循環の輪の中にいるということに、働く喜びと意義を感じています。

高校では管弦楽部に所属していましたが、部活動はまさに社会の縮図であったと思います。礼儀、スケジュール管理、チームワーク、日々の努力の積み重ね、等、社会に出て必要なことの多くは、部活動で体得できました。また、楽器収音用のマイクを設計する際には、管弦楽部で得た楽器や演奏の知識が大いに役立ちました。高校での部活動の経験が、今でも私を支えています。

マイクの設計に興味は尽きませんでした。次第に業務のマンネリ化や、後輩社員の活躍に焦りを感じるようになりました。設計には、エンジニアとして理系の知識が必要でしたが、それだけでなくユーザーの声を形にするデザイン能力やコミ

ュニケーション能力も必要だと思うようになりました。文理選択時、絵を学ぶことを優先していたら、そんな能力も持てたかもしれない…。そう思うのであれば、これから勉強してみようと大学院進学を決め、工業デザインを学び始めたのは社会人12年目のことでした。

クラスの半数が私と同じような悩みを持つ社会人という環境で、仕事が終わってからの夜学でした。高校での勉強の中には、将来何の役に立つのか今はわからないものもありますが、社会人大学院では、仕事にどうやって結びつくのか、これまでの社会人経験を通してわかりますので、習ったことを即吸収することができます。これは高校や大学の授業にはない感覚で、学ぶことの楽しさを改めて実感しました。

大学院卒業後、商品企画部に異動の機会を得て、現在に至ります。情報収集のために海外の客先や展示会に出向き、英語でのコミュニケーションが日常になるとは、高校の理系選択時には想像もしていませんでしたが、大学院で学んだことで新しい環境で働く準備もできていましたし、エンジニア時代よりも幅広くマイクの開発に携わることができるようになった今の業務に、やりがいと喜びを感じています。

働きながら大学院で学ぶことを応援してくれたのは、エンジニア時代に仕事を通して知り合った海外の仲間たちでした。海外では働きながら、または働いて学費を貯めてから学校に通うことは普通のことなのです。社会人になっても学ぶ機会は沢山ありますし、やり直すことも可能です。高校生である皆さんには、後悔を恐れず、自分の好きなことに向かってまず一歩踏み出してほしい、と私の経験を通してお伝えしたいと思います。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）